

第32回学習会を、平成23年9月9日(金)19:00~20:00福岡市教育センターにて行いましたので報告いたします。

### 第32回目の内容

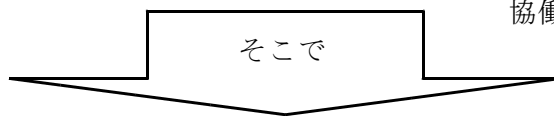
講師 重枝一郎先生(福岡市教育センター主任指導主事)

- 1 不登校は学校魅力で減らす
- 2 4つのプロット図(不登校, 生徒指導, 学級状況, あいさつ)
- 3 言葉(心)のキャッチボール
- 4 体験活動「もし、子どもが・・・」
- 5 実践交流 小島先生(博多中学校)



## 不登校は学校魅力で減らす

○ 不登校は「心の問題」であり、心の専門家に任せるといふ考え  
 (ゆとり対応, 学校解決に固執しない, 心の成長待ち) SC, 教育相談員 結果が出ていない  
 協働しにくい (2010, 文科省)



**学校魅力**

 で不登校を減らす (2010, 文科省「生徒指導提要」)

- ①学習    ②活動    ③対人関係

### <オールビーの予防等式>

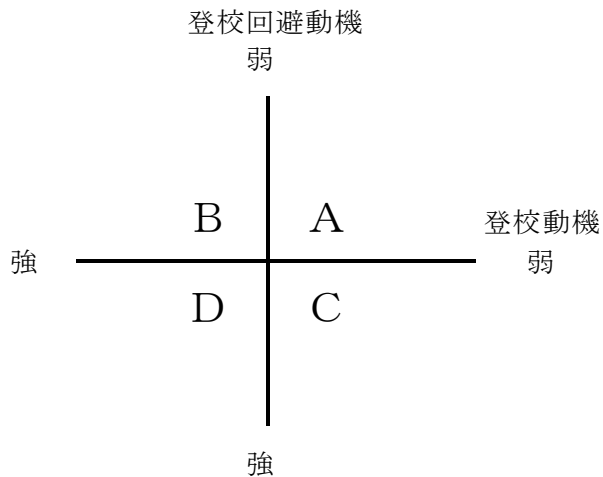
学校, 学級の共同体で起こる  
行動上の問題, 適応上の問題の大きさ

$$\begin{array}{ccc}
 \text{周りの人的環境} & & \text{生得的特徴} \\
 \downarrow & & \downarrow \\
 \text{ストレス+個人的傷つきやすさ} & & \text{危機因子} \downarrow \\
 \hline
 \text{対処能力+社会的支援網+自尊心} & & \text{保護因子} \uparrow \\
 \uparrow & & \uparrow \\
 \text{読み・書き・計算, 対人能力} & & \text{承認感, 成功体験}
 \end{array}$$

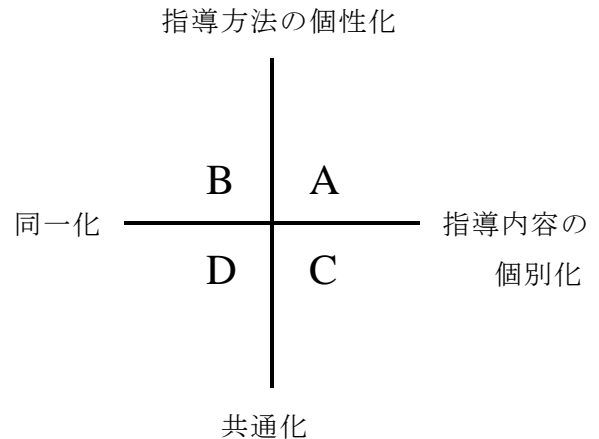


= **学校魅力**

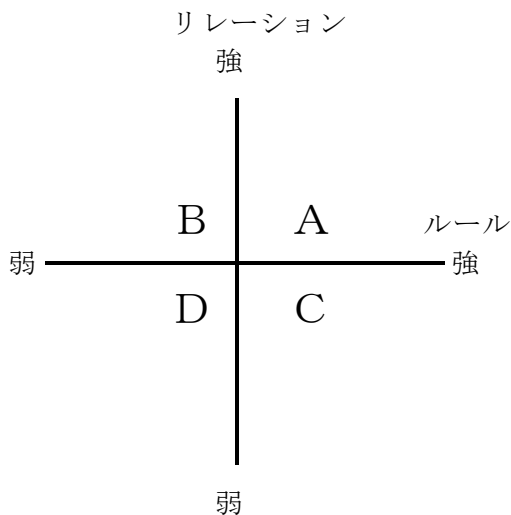
### 不登校プロット



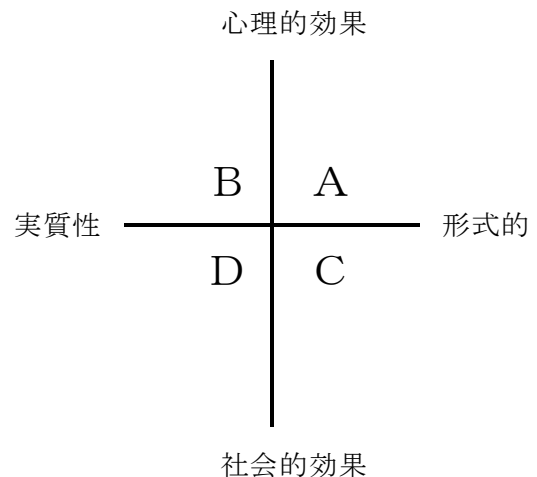
### 生徒指導プロット



### 学級状況プロット



### あいさつプロット



### 解説

#### ◎ 不登校の子どもについて語れること

「風土会」では、「実践と理論の融合」をめざしています。  
それは、「実践のない理論は空論，理論のない実践は徒労」だからです。

中学校教師であればだいたい、不登校の子どもを担当した経験があるのではないのでしょうか。  
私（柴田）も、何度かあります。

最初に不登校生徒を担当したのは、教師になって5年目のことです。2学期から突然、学校を休むようになりました。几帳面でまじめな男子生徒でした。黙々と教室のぞうきんがけをしている姿が印象的でした。何度も何度も手を洗っている姿を見ました。その姿に、何か異様なものを感じていました。

まずは、家庭訪問です。何度も通ううちに、「明日は学校に行きます！」という約束ができました。その明日が来たとき、学校にお母さんから電話がありました。「2階の窓から落ちました。ケガはありませんが、休ませます」

その時に悟りました。専門家の話を聴こう。専門的な見地に基づいてかかわらないと、取り返

しのつかないことになる・・・。

そして、専門家からのアドバイスは、「登校刺激をしてはいけません。その子は心のエネルギーが枯渇しているのです。今は、そのエネルギーがたまるのを待つときです」

こうして、専門機関と連携することになりましたが、残念ながら3月になっても登校することはできませんでした。

重枝先生もさまざまな経験があります。生徒指導を担当していたので、自分の担任する生徒に限らず学年の全生徒について、前面にたって指導をされています。

最初の頃は、強制性を背景に強引な指導をされています。例えば、家庭訪問をして、無理矢理にでも着替えさせて学校に連れて行きました。非行性のある不登校生徒であれば、寝ているおふとんにもぐりこんで起こし、連れて行くというような・・・。学年教師と役割分担をして、その生徒の話をじっくり聴いてもらうこともしています。とにかく手探りでも熱血でパワフルな指導をしていたのです。

しかしその後、不登校対応では、「ゆとり対応、心の成長を待つ指導が大切だ」という風潮になっていきます。強制的な指導では、その子を追い込みダメにするのか？今までの自分のやり方はまちがっていたのか？という思いをもちながらも、不登校生徒は増える一方。そんな学校現場には、スクールカウンセラーや教育相談員が配置されることとなります。専門家や専門機関との連携です。しかし、やはり不登校生徒は、それほど減っていないという現実があるのです。

専門機関に任せると、教師の心は軽くなります。しかし、かかわりは弱くなります。指導のキレがなくなります。どこか遠慮しながらの指導では、見せかけの毅然とした態度にならざるをえません。

かかわらないと何も生まれません。

そこで、「**学校魅力で不登校を減らす**」という発想です。

## ◎ 学校魅力とは

学校の魅力とは、「学習の魅力」 = 授業  
「活動の魅力」 = 行事、部活  
「対人関係の魅力」 = 友だちがいるから、あの人がいるから・・・

この3つを高めるという発想だと、シンプルでブレのない指導ができると思います。

重枝先生は、前前任校で、不登校が劇的に減ったという経験があります。

2001年	不登校	25名
2年		16名
3年		13名
4年		3名
5年		0名

このときの取組は、個別支援はあたりまえで、同時に、学校魅力を高めていたのです。つまり、「学習・活動・対人関係」が魅力的になっていたということです。

個別支援にかたよるのではなく、学級や学年、学校全体の「集団教育力」を高めることで、シンプルにエネルギーを高めるのです。

「オールビーの予防等式」で考えると、分母を高めて分子を減らすという発想です。

分母の「対処能力」「自尊心」は、学校の教育活動を通して高めることができます。

分子の「ストレス」は、まわりの人的環境からのストレスと、生得的なもとのストレスの感じやすさがあります。しかし、学級の空気がよければ、つまり、ルールが守られていて人間関係が良好であれば、安心感に包まれ、ストレスは減っていきます。

つまり、分母を大きくして分子を小さくすることで、学校魅力を高めていくのです。

# 〈オールビーの予防等式〉

学校，学級の共同体で起こる  
 行動上の問題，適応上の問題の大きさ

$$\begin{array}{c}
 \begin{array}{ccc}
 \text{周りの人的環境} & & \text{生得的特徴} \\
 \downarrow & & \downarrow \\
 \text{ストレス+個人的傷つきやすさ} & & \text{危機因子↓} \\
 \hline
 \text{対処能力+社会的支援網+自尊心} & & \text{保護因子↑} \\
 \uparrow & & \uparrow \\
 \text{読み・書き・計算，対人能力} & & \text{承認感，成功体験}
 \end{array} \\
 = & & = \\
 & & \text{学校魅力}
 \end{array}$$

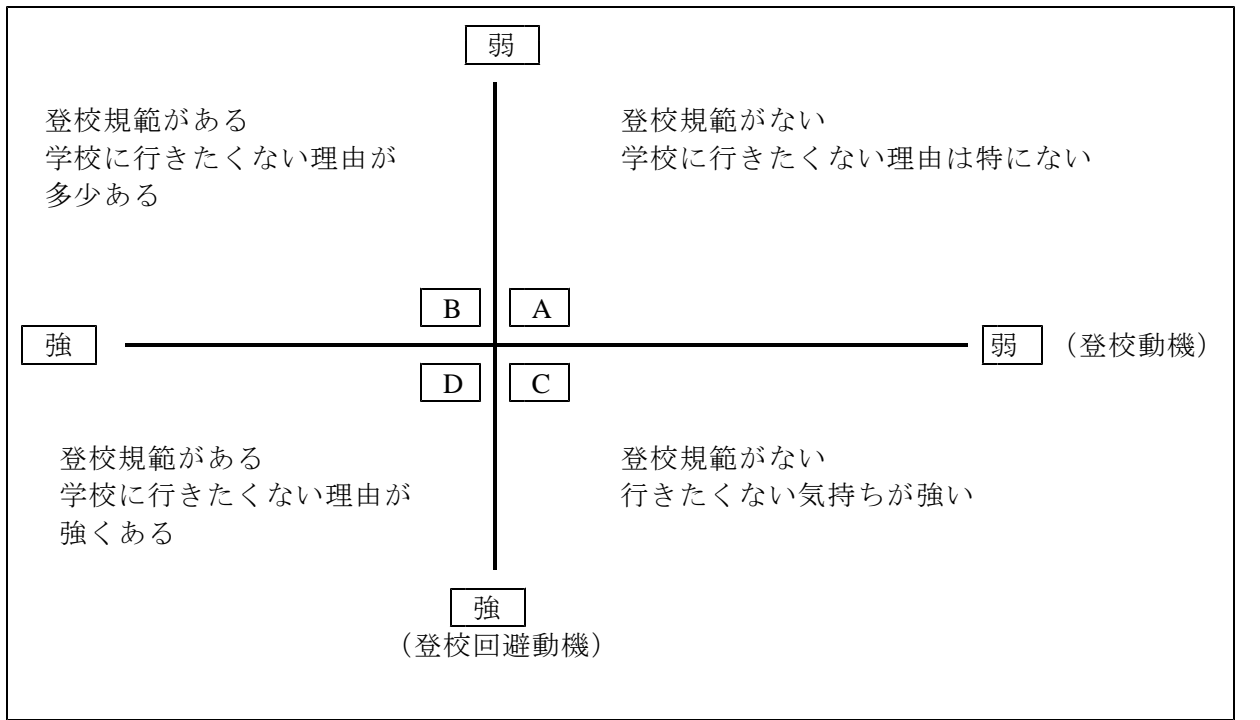
## エクササイズの体験活動 その1 「不登校プロット」

- 「不登校プロット」**
- ・プロット図で，個々の不登校の実態や状況を整理する
  - ・実態把握に基づく個に応じた対応策を考える
  - ・プロット図に書き込むことで「見える化」し，他の教師と協議し共有する

「不登校プロット図」を用いて，4領域の子どもの実態や対応策を考える。  
 まずは，個人で考える。できるだけ具体的なイメージをもって書き込む。  
 例えば「部活が大好きで友だちも多いが勉強が苦手・・・」というように，人物像を書く。  
 ありきたりの言葉でよい。

### ○ 不登校プロット図の意味を理解

「登校回避動機」の強弱とは，学校に行きたくない理由の強弱を示します。  
 「登校動機」の強弱は，学校は行って当たり前，行くべき所であるという考えの強弱です。



## ○ 不登校プロット図に個人で書き込み、グループ協議

まず、個人で「不登校プロット図」にどんな子どもが入るかを考え、書き込みました。次に4人グループで、協議です。

私のグループでは「Dタイプ」について、いろいろな意見が出ました。

例えば、「いじめられているまじめな子ども」「内向的で内気な子ども」「親の期待が強すぎる子ども」などです。

学校には行くべきだと思いつながら行けないということは、相反する気持ちが強く引っ張り合う、心が引き裂かれる状態です。

例えば、勉強が得意な生徒会活動にも熱心な子どもが、親しい友人の裏切りにあい、学校に行けなくなっている状態かもしれません。このように、リアルに子どもの顔が浮かんでくるように考えてみると、その対応策も実感をもって考えることができます。

この場合は、学校に行けなくなっているつらい気持ちに耳を傾け、少しずつストレスを軽減させていくという対応策が考えられます。

## ○ 不登校タイプの実態と対応例

(実際にあった事例の成果をまとめたものです)

「Aタイプ」

- ・勉強苦手、ゲーム好き、部活にも参加していない
- ・学校魅力の中から、小さな登校動機を探し出し、それを広げていく
- ・美術が得意→美術の先生との関係から糸口を見出す

「Bタイプ」

- ・登校規範はある
- ・ちょっとしたトラブルから学校に行きたくない、つい言っている
- ・リレーションを高める指導

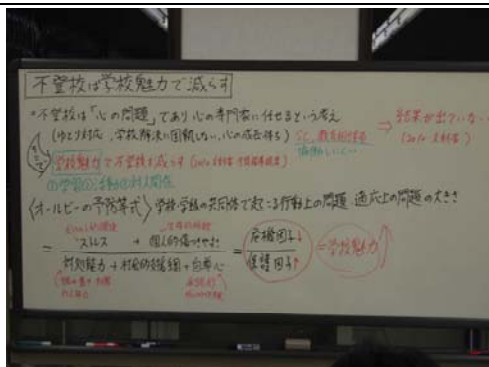
「Cタイプ」

- ・登校規範なし
- ・無気力だったり、非行性があつたりして退学傾向
- ・ルールを決めて、基本的な生活習慣をつくる
- ・強制性を背景にしながら、ほめて、強化していく

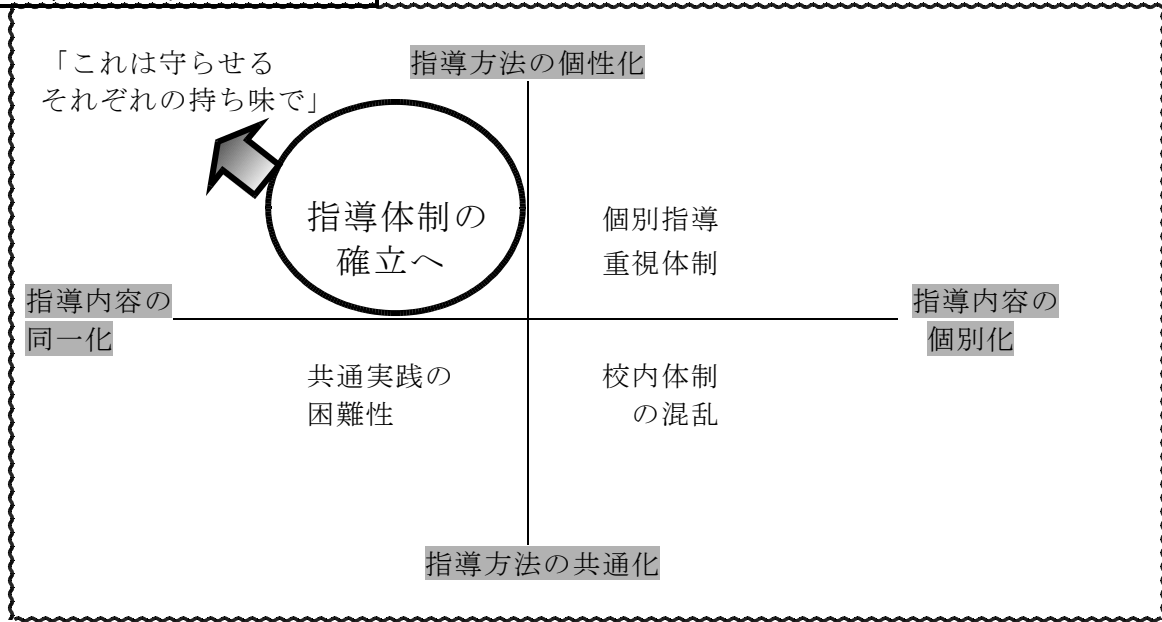
## ○ 不登校対応として、「登校動機」をつくり出していく

不登校の原因はよく話題に上がりますが、学校欠席率が低い要因についてはあまり話題になりません。欠席率が低い学校は、「学校魅力」が高いのです。これは、不登校傾向の子どもにも「登校動機」をつくり出しているということにつながっています。

不登校といっても、それぞれの子どもの実態や「登校動機」は違います。部活があるから学校に行くという子どももいれば、友だちがいるから学校に行くという子どももいるでしょう。その実態をふまえて、対応していくという発想、つまり、その子どもの学校魅力を形成するという視点が対応策になります。



# 生徒指導プロット



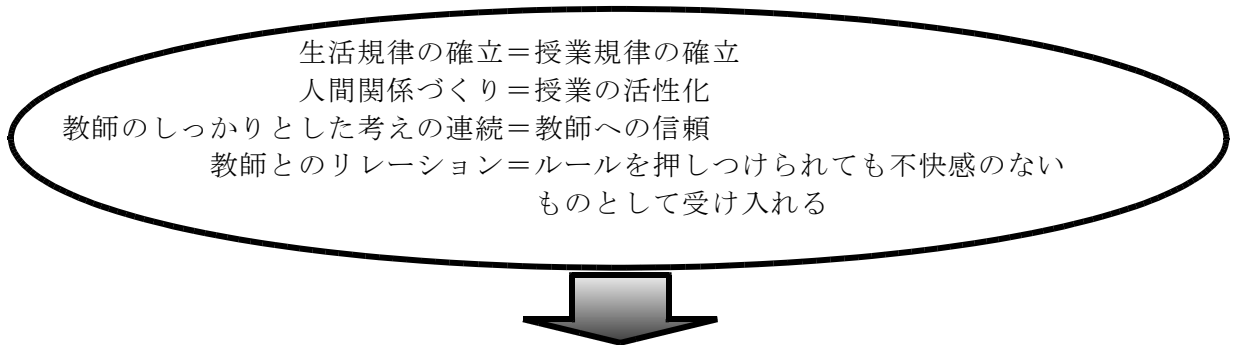
例えば・・・友だちのふでばこを窓から外に投げた生徒に

A先生：「拾ってこい！」(P) その後そっと後を追い，肩を並べて教室に戻りながら「何をカッカしているんだ」と語りかけた。(M)

B先生：「どうしたの？何かムシャクシャしているんだね」(Mから入る)とスキンシップ。「でもふでばこは拾ってきなさい。それと〇〇君にあやまることを忘れてたらダメだよ」(P) 責任を取らせることは怠らない。

(P：指導面，M：支援面 ※PM理論参照)

※「ダメはダメ」のゼロ・トレランスの理念が根底にあれば生徒指導体制の構築の妨げにはならない。(見せかけの毅然とした態度はダメ)



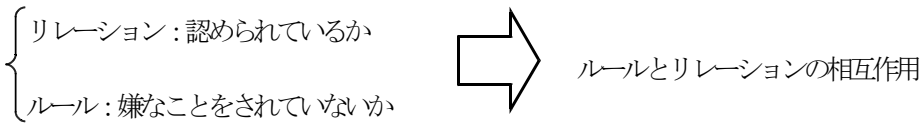
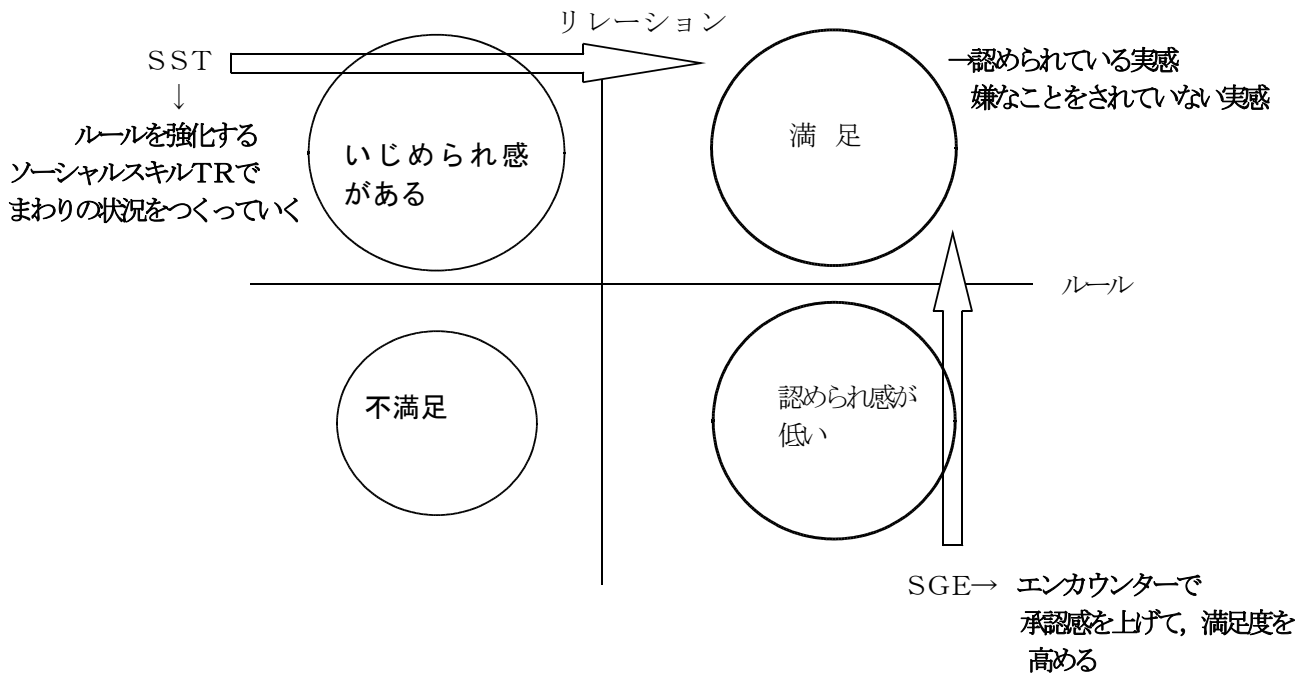
## 学力保障・向上への基盤となる

### 【解説】

指導方法と指導内容を図式化した上図では、「左上」が一般的に良い生徒指導といわれます。内容は決めるが，方法はその先生の持ち味でやるというものです。「右下」は，指導内容が同じではなく，指導方法同じ（ありえない）。これは，校内体制が混乱します。「左下」は指導内容も指導方法も同じです。これは，自分に合わないアプローチを生徒にすることになる教師には困難性があります。

指導内容は統一していても，指導方法が個性化していれば，例えばA先生はPが先で次にM，B先生はMからPというように，自分の持ち味が生かせることになり，教師の負担感やストレスがありません。

# 学級状況プロット

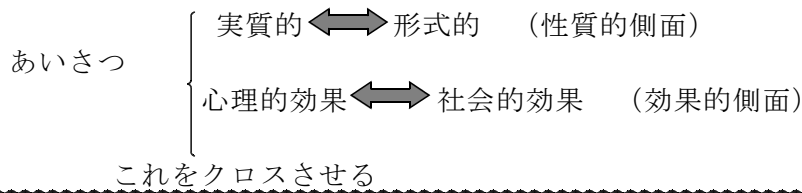


「満足群」をめざして、状況に応じた対応をする。  
この対応は「学校魅力」を高めることにつながる。

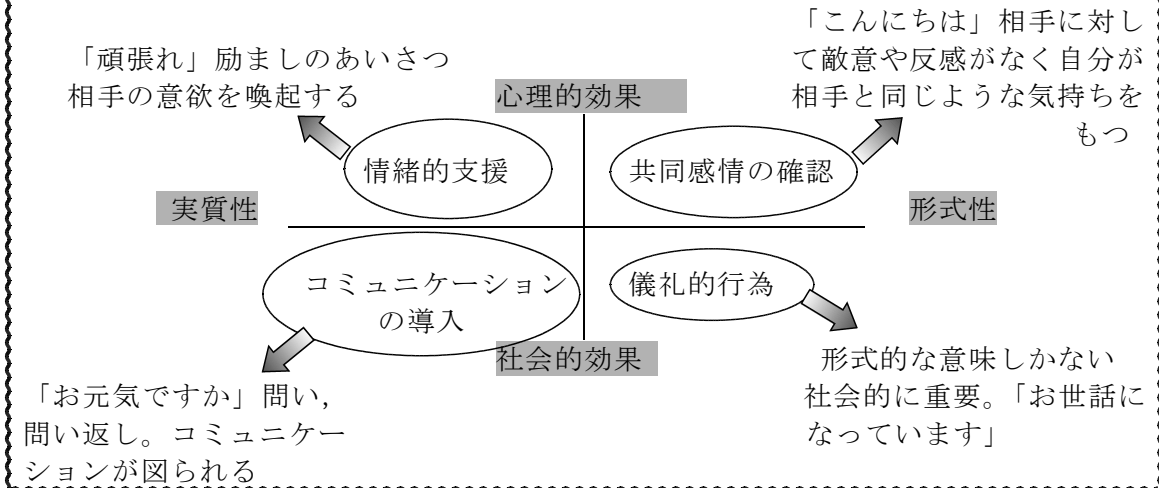
- SST: ある行動をつくることでまわりを変化させその人の不安を消し、こうすれば大丈夫と思うと、より問題解決が容易になる
- SGE: 認め合いの体験の中で、共に生活する喜びを実感する



# あいさつプロット



## 【4つの意義】



では、「あいさつができない人」ってどういう人？(生徒に意識づける)

- ・情緒的支援という意義に即せば、励ましたり、共感しようとしなないことから、相手に関心を持たない孤独な人
- ・共同感情に欠け、相手に反感や敵意を持っているか少なくとも相手との関係を拒否している人
- ・コミュニケーションがうまくとれず、儀礼的行動ができないという意味で常識に欠ける人

総じていえば、社会生活が円滑に営めない人

・・・と社会からは判断されてしまう

※多様な体験の機会を与える必要がある(親・教師・地域・企業)

【解説】

共同感情の確認：相手に対して敵意や反感がなく、自分が相手と同じような気持ちをもつ  
(例)「こんにちは」

情緒的支援：励ましのあいさつ。相手の意欲を喚起する(例)「頑張れ」

儀礼的行為：形式的な意味しかないけれど社会的に重要(例)「お世話になっています」

コミュニケーションの導入：問いに問い返し。コミュニケーションが図られる  
(例)「お元気ですか」

あいさつは場面によって、4つの意義を満たしています。単純に「あいさつ」ですが、いろいろな「あいさつ」の練習を「ソーシャルスキルトレーニング」として行います。

また、あいさつができない人とはどんな人なのかを考えさせることも有効です。「悪い見本」や「逆の見本」は生徒に強い印象を与え、深く学ぶことにつながります。自分ではそう思っていないまでも、「あいさつができない人」は、社会から「常識に欠ける人」「孤独な人」などと判断されてしまうということを理解させます。



## 「言葉のキャッチボール」

「心のノート」P.58～59の内容をエクササイズにしました。  
ただ、内容を読みワークシートを書くのではなく、体験型の学びです。  
自分で行動すると「90%の学び」となるのです。

人の学びの記憶	：	聞いたことは	20%	の学び
		見たことは	30%	の学び
		自分で口に出すか書く	70%	の学び
		自分で教える・行動する	90%	の学び

テニスボールを使ったエクササイズです。テニスボールが自分の「心」です。  
はじめて「風土会」に参加された小学校の先生と重枝先生がデモンストレーションをしました。

(1回目)「おはよう」と言っ、ボールを強く投げつける → 〈ビックリ、ムカッとする〉  
重枝先生はおもいきり、ボールを投げつけました(すみません)  
相手の先生はビックリした表情!!まわりの先生も唾然です。  
「どんな気持ち?」インタビューに答えて、「ビックリしました。嫌な気分です」

(2回目)「おはよう」と言いながら優しく投げてもらったボールを、無視してとらない  
→ 〈ショック、悲しい、イヤな気分〉  
重枝先生が言います。「ごめんごめん、次は自分に投げて下さい。優しく受けとめやすいようにね」  
リクエストに応じて、優しく投げたボールを、おもいきり無視します。  
見ていた先生たちから思わず「えー」という声が上がりました。  
「どんな気持ち?」「ものすごくショックです。泣きそうです」本音が出ました。  
大人でもこんなにショックです。感受性の強い子どもなら、なおさらですね。

(3回目)キャッチボールをする → 〈1, 2回目の後なので、すごく気持ちがいい〉

この体験型エクササイズは、「気持ち」を味わうことができます。  
無視されたときの悲しい気持ち。想像以上に傷つくということが実感できます。  
だから、あいさつや言葉、気持ちのキャッチボールが大切だということを納得させます。  
あいさつの意義を納得させるのです。  
逆刺激で、「あいさつのできない人ってどんな人?」「社会性のない人」ということも、  
おさえておきたいところです。



## 「もし、子どもが……」(親GWT)

- ねらい：自分の考えを話したり，他の人の考えを聴くことにより，子育てについての考え方を深める
- 準備 ・課題シート ・課題カード(A, B) ・振り返りシート
- 進め方 ①4～6人のグループをつくり，机を囲んで座る  
②課題シートと課題カードを各グループに配る  
③課題カードはだいたい同じ枚数になるように，グループのメンバーで分ける  
④実施(25分)  
⑤答え合わせの後，振り返り活動をして全体でシェアリングする
- 留意点 ・肯定的なカードと否定的なカードを分けてからとりかかると早くできる  
・否定的な内容の方が，正解率は高い  
・時間がないときは，肯定的なカードのみで行うとよい

### 【課題シート・課題カード】

#### 課題シート A

#### 課題カード A

もし、子どもが 勇気づけを受けて 育てられると	→	自信をもちます
もし、子どもが よいと認められて 育てられると	→	自分自身を好きになります
もし、子どもが したことを認められて 育てられると	→	目標をもつことはよいことだと思います
もし、子どもが 心の寛容な人の中で 育てられると	→	忍耐強くなります
もし、子どもが 誠実に扱われて 育てられると	→	真実が何であるかを考えるようになります
もし、子どもが 公正に扱われて 育てられると	→	正義が何であるかを考えるようになります
もし、子どもが 人に受け入れられて 育てられると	→	人を愛するようになります

もし、子どもが  
安心して  
生きています

→

自分自身と自分の周りのものを信頼します

もし、子どもが  
親切にされて  
生きています

→

世界は生きていたり、愛したり、愛されたりする、すてきな場所であると感じます

### 課題シート B

### 課題カード B

もし、子どもが  
競争にあおられて  
育てられると

→

人と協力できなくなります

もし、子どもが  
高望みされて  
育てられると

→

自分を無能だと思いこみます

もし、子どもが  
過保護に  
育てられると

→

自分の行動に責任をとらなくなります

もし、子どもが  
甘やかされて  
育てられると

→

自分中心になりエゴイストになります

もし、子どもが  
敵意に満ちた中で  
育てられると

→

喧嘩で問題を解決するようになります

もし、子どもが  
子育てに一貫性をもたないで  
育てられると

→

人を信頼しなくなります

もし、子どもが  
権威的な環境の中で  
育てられると

→

支配的になり力に頼るようになるか、  
卑屈になり力に屈するようになります

もし、子どもが  
批判ばかり受けて  
育てられると

→

非難ばかりするようになります

もし、子どもが  
冷やかashiを受けて  
育てられると

→

はにかみ屋になります

もし、子どもが  
ねたみを受けて  
育てられると

→

いつも悪いことをしているような気持ちになります

もし、子どもが  
哀れみを受けて  
育てられると

→

自分をみじめに感じるか、哀れみを誘って  
義務を逃れるようになります

出典「協力すれば何かが変わる」監修 坂野公信 日本学校 GWT 研究会著 遊戯社

## 保護者会用 『もし、子どもが・・・』 (振り返りシート)

- 1 話し合った内容についてお聞かせください

- 2 グループごとの話し合いが始まってから終わるまでの、ご自身の様子を振り返ってください。

(1) 自分の考えをはっきり他の人に発表できましたか (○を付けてください)

できた 

4	3	2	1

 できなかった

(2) 自分の考えを他の人は聴いてくれましたか (○を付けてください)

くれた 

4	3	2	1

 くれなかった

(3) 他の人の考えをしっかりと聴けましたか

できた 

4	3	2	1

 できなかった

- 3 子どものとき許してもらえなかったことで、あなたの子どもにはやらせてあげようと思うことは何かありますか？

- 4 自分の子どもに許可しないことはありますか？2つ書いてみてください

- 5 あなたが自分の子どもに対して「これだけは言わない！」と決めていることはありますか？3つ書いてみてください

## 《体験活動の解説》「もし、子どもが……」(親GWT)

### ○ インストラクション

4, 5名のグループで行うGWTです。

保護者会等で行うことができます。

40枚のカードに書かれている内容を読み、適切なカードの組み合わせを決めていきます。

書いてあるのは、「もし、子どもが……だったらどうなるか」ということです。

育てられ方によって子どもがどうなるのかを、お互いが納得するように話し合いで決めていきます。自分勝手に決めるのではなく、みんなで合意するのです。(コンセンサス実習)

子どもが活動するときによくあるのは、1, 2人の意見で進んでいくことです。それを見逃さないことが大切です。

自分なりの考えや根拠を言いながら、話し合い活動をします。

### ○ 体験活動

まず、班長さん役の先生が、各先生に同じ枚数になるようにカードを配ります。

課題Aは肯定的な内容で、Bは否定的な内容ですが、両方が混在しています。

漠然と取り組んでいるグループに対して重枝先生から「カードの特徴に気付きましたか」という助言があり、内容を読みながらカードをA, Bに分けるといいと気付きました。

保護者会で実践するときも、戸惑っている様子があればタイミング良くアドバイスする必要があります。

カードをA, Bに分ける作業はスムーズにできましたが、内容を読み、カードをあてはめていく作業は難しく、迷うものばかりです。『これとこれが絶対に結びつく』という自信はもてません。

しかし誰からともなく、「これは、こうだから、これと結びつくんじゃないでしょうか」「そうかもしれないですね!では、そうしてみましよう」というように意見が出始め、話し合いが進んでいきました。

人の意見を聴くと、「なるほどねえ～」と感じたり「自分も同じように思った」と共感できたりします。

カードに書いてある内容自体が考えさせられる内容なので、一層、自分の考えが深まります。よい雰囲気です、話し合いが進みます。

子どもにも、「こんな雰囲気です話し合いができればいい」ということを感じさせます。

聴いてくれるという空気ができれば、話ができるのです。そのために「ルール」を意識させ、聴いてもらえてうれしかったという「リレーション」を促進します。

学級の状態で、「ルール」強化のSSTか、「リレーション」強化のSGEを選択し、マッチングさせます。SSTとSGEを統合させるのです。

### ○ 答え合わせ

答え合わせのときに印象に残る話ができると、このエクササイズをした意義が深まります。

「心の寛容な人の中で育てられると」に続く答えは「忍耐強くなる」です。

これに関連して、「レジリエンス」の話ができます。

忍耐強くなるためには、がまんしたり、きびしさに耐えたりすることが必要なのかと思います。しかし、忍耐強さを維持できるかどうかは、まわりの人的な環境によるところが大きいのです。自分一人で歯を食いしばって、忍耐強くすることはありえないのです。まわりの支えがあることで、忍耐強さが生まれます。

子どもにも、「だからチームワークが大切」ということを話せます。

教師も、困難なときの合言葉として、「先生同士の仲が良ければ、たいがいのことは大丈夫」3歩進んで2歩下がるような状況でも、忍耐強く、教育活動に向き合っているのです。

## 「高望みされて育てられると」に続く答えは「無能だと思ひ込みます」

これに関連して、「成長型マインドセット」の話ができます。

スタンフォード大学のキャロル・ドゥエック教授は、400 人の子どもたちに簡単なパズルを解かせる実験をしました。パズル終了後に半数の子どもには「あなたはこれが上手ね」という才能への褒め言葉を、残りの半数には「よくがんばったね」という努力への褒め言葉を与えました。

その後 2 回目に難しいパズルを解かせるテストを行うと、失敗に対する反応の仕方に違いが見られました。才能を褒められたグループの子どもたちは「やっぱり自分はパズルに向いていなかった」と解釈し、努力を褒められたグループの子どもたちは、より長時間パズルに取り組んだだけでなく、解くことを楽しみ、解けなくても自信をなくすことはありませんでした。

3 回目は、1 回目と同じ難易度のパズルを行いました。その結果、才能を褒められたグループは 1 回目より 20% 得点が下がり、努力を褒められたグループは、30% 得点が上がりました。

この差をもたらしたのは、1 回目のテストの後の簡単な褒め言葉の違いだけです。

このことから、才能への賞賛は「硬直型マインドセット」に向かわせ、

努力への賞賛は「成長型マインドセット」を維持できるということがわかりました。

例えば部活でも勉強でも、必ず壁にぶつかることがあります。

保護者にも地域の人にも、「成長型マインドセット」の話をしておくと、そのときの声のかけ方が変わってきます。

「シンプルに努力をほめてください」と学校側として話しておくのです。それが、学校と保護者、地域の連携につながります。

地域の人や保護者が「がんばっているね、すごいね」とほめてくれることで、子どもは「成長型マインドセット」に入るのです。

### ○ 大切な「振り返り」

GWTでも何でも、活動の後の「振り返り」がとても大切です。

「こういう意義があるんだ」という意味面と、「人と話せて良かった、聴いてもらってうれしかった」という感情面の両方を交流させます。

重枝先生は、「もし、子どもが・・・」を地域懇談会で 200 名相手に実践されています。

人数が多いので、6 人 1 グループで行いましたが、講演会の雰囲気ガラリと変わったそうです。話し始めると、どのグループでも笑顔があふれ、話し合いが活発に進みます。

感想を言ってもらうと、自分の子育ての反省をしています。

このエクササイズを通して、知らない親御さん同士が自己開示し、自分の子育てを見つめ直す機会になっているのです。

子育てについて説教されるよりも、参加体験型のエクササイズは、当事者意識をもちながら深い学びができます。その学びを「振り返り」で交流することで、新たな気づきを得ることができるのです。

風土会終了後、さっそくある小学校の先生方が「もし、子どもが・・・」を 1 セット、借りて帰られました。保護者会でしてみるそうです。そのチャレンジ精神がステキです。

軽いフットワークでどんどん実践してください。

きっと、実践することで、さらなる学びがあると思います。



☆ 今回のキーワード ☆

- 不登校は学校魅力で減らす
- オールビーの予防等式
- 学習の魅力・活動の魅力・対人関係の魅力
- レジリエンス（しなやかで折れない心）：心の寛容な人の中で→忍耐強くなる
- マインドセット（硬直型マインドセット）：高望みされて→無能だと思う



♪学習会に参加された先生方の感想♪ （参加人数 45名）

- ・不登校プロットで、じっくり考えることができました。不登校の生徒に対して、「学校に行きたくない原因」ばかり見てしまいがちでした。不登校にもそれぞれに実態があり、その子に合った支援を仕組むことと、学校に登校したいと思う「学校魅力」を高めていくことの大切さを改めて実感しました。
- ・不登校プロット、生徒指導プロット、学級状況プロット、それぞれを自分の受け持っている学級に当てはめて考えることができました。また、不登校の指導については、重枝先生がおっしゃったように、個別指導ではなかなか改善が見られず、やはり学級集団の環境を変えていく必要があると思いました。まず、不登校以外の生徒が元気に学校に来て、安心して生活できるような集団づくりをできるようにしたいと考えています。エクササイズもぜひ、PTA 保護者会で実践したいです。
- ・学級状況プロットで、自分の学級は最近、左上のなれ合い型になってきているのではないかと思います。ルールを強化するために、ソーシャルスキルトレーニングを何かやってみようと思います。風土会で何か紹介していただけると嬉しいです。

(→プロット図で考えると、実態や状況を整理できます。そうすることで、どんな対応が必要なのかが見えてきますね！)

- ・小学校の先生方の参加が増え、どんどん認知がすすんでいることは、ニーズの高まりの証だと思います。人間関係づくりや GWT を取り入れた校内研修を行っています。これからも、アウトプットし続けたいと思います。
- ・私は重枝先生との「キャッチボール」を体験しましたが、ボールをとってもらえない時の気持ちは本当に悲しくむなしくなったので、相手の気持ちが分かって良いと思いました。無視、拒否って、こんなに悲しいのかと。

(→初参加の小学校の先生に「心のキャッチボール」のデモンストレーションに協力していただきました。体験して実感すると学びが深くなります。小・中の先生と一緒に学ぶ「場」として、これからも「小中連携」で、学び合いたいです)

- ・特に、「子どもはこう育てられると～になる」のエクササイズがとても良かったです。懇談会も近いので、ぜひ取り入れたいと思いました。才能をほめるより努力を認めた方がよいことがわかり、「なるほど！」と心に残りました。そして、テニスボールを使った「あいさつプロット」。友だちの話を真剣に聴くという姿にもつながっていくと思うので、早速実践してみようと思いました。
- ・「心の寛容な人の中で→忍耐強くなる」という答えがショッキングでした。厳しい環境の中で鍛えられると、人は忍耐強くなるのではないかと漠然と考えていました。よく考えると、周りからの声かけやはげましによってモチベーションを上げて、つらい時でもがんばろうと思う心が育つのだと思いました。このことを学べただけでも、今日参加して本当によかったと思います。

## ♪「実践発表」(小島先生 博多中学校)への感想や自分の実践について♪

- ・自分のクラスと真剣に向き合っていること(気持ち)がとてもよく伝わってきました。クラスでひとつのことをして味わう達成感!2学期もがんばっていきましょう。私も自分のクラスと向き合っていこうという「エネルギー」をいただきました。がんばります!
- ・小島先生が中途半端に終わらせるのではなく、子どもたちに達成感を味わわせたいという気持ちで最後まで取り組まれたことに、すごいなあと思いました。
- ・小島先生が先の見通しをもち、グループワークトレーニングを活用して集団づくり、学級づくりをされていることがよくわかりました。ありがとうございました。

(→「クラスに真剣に向き合い」「中途半端に終わらせず」「子どもたちに達成感を味わわせる」・・・

そのためには「先の見通し」をもった実践です。小島先生の実践には、これらのことがすべて含まれていました!)

- ・実践報告ありがとうございます。学級の中には、自分の気分で集団の活動にのったりのらなかったり、マイナス発言をしたりする子どもがいます。マイナス発言をする子どもを上手に引き込み、集団に取り入れていくことができるのが、このような活動(エンカウンター等)だと感じました。
- ・興味や関心を示さない生徒への声かけや支援の仕方が、自分自身のテーマのひとつでもあったので、タイミングとアドバイスの内容のお話が聞けて、勉強になりました。
- ・私は新採3年目ですが、うまくいかないことも多々ありますが、負けずにたくさんの実践をしたいと思います。実践をすることで失敗や成功があるので、それを大事にして、次に生かしていきたいと思いました。実践レポート、ありがとうございました。
- ・一度、うまくいかずに失敗したとしても、再度挑戦して、時間をかけることが学級づくりには必要なのだと思いました。成功するまで続けることが大切だと思い、参考になりました。
- ・クラスの実態がよくわかり、自分のクラスと重なるところもあり、どういった実践なのかを興味深く聞きました。一筋縄ではいかなかった苦労したところも聞くことができたので、とてもためになりました。  
子どもの感想から、この実践で得るものは確実にあったと思います。

(→むずかしい子どもがいるからこそ、このように実践交流で学び合い、教師が高め合っていくのですね。そんな子どもたちのおかげで、教師も成長するのです。そして、得るものは確実にあるのです!!)

- ・風土会で学んだことを学年教師で取り組もうとしていますが、何か単発に終わってしまい、打ち上げ花火にならないようにと思っています。小島先生!がんばります。
- ・私のクラスでもエンカウンターをしたときに、同じような状況ができました。私の場合は、リベンジする時間がなくて、指導としては不十分に終わってしまいました。  
秋は合唱コンクールの季節です。小島先生の実践から学んだことを生かして、クラスをまとめていきたいと思っています。使わせていただきます。
- ・若い先生の力一杯の学級経営にふれて、とてもさわやかな気持ちになりました。「自分のクラスではうまくいかないから、GWTに取り組むのはちょっと・・・」と引いてしまうのではなく、子どもたちに正面からぶつかり、いろいろなことを学びながらチャレンジされている姿に、「私もがんばらなくちゃ!」と思いました。報告、ありがとうございました。



